R7-613

エコミュージアム技法の移転によるタイ居住文化の保全継承手法の開発と人材育成

芝浦工業大学・建築学部
教授　清水　郁郎

1.　調査研究の背景と目的

近年、東南アジアの農村や歴史的市街地では、都市化、観光化、生活様式の変化により、地域固有の居住文化が急速に変容している。伝統的な民家、集落景観、生業、儀礼、生活技術などは、長い時間をかけて地域社会の中で育まれてきたものである。しかし、それらは必ずしも文化財として指定されるものではなく、住民にとっては身近で自明な存在であるため、外部から価値を認識されないまま失われることが多い。

本研究が対象とするタイ北部の集落にも、木造高床式住居、穀倉、寺院、精霊祠、農地、年中行事などが相互に結びついた生活世界が残されている。一方で、若年層の都市流出、観光開発、建築材料や生活設備の変化により、伝統的な住居や集落景観を維持することは難しくなっている。これは単に古い建物が失われるという問題ではなく、住まい方、生業、信仰、社会関係を含む居住文化そのものが継承されにくくなるという問題である。

そこで本研究では、地域全体を「生きた博物館」として捉えるエコミュージアムの考え方を用い、居住文化を「住みながら維持する」方法を検討した。目的は、第一に、日本で蓄積されてきた木造建築の調査・記録・修復技術を、タイの居住文化の保全継承に応用することである。第二に、エコミュージアム化が地域の文化継承、住民の意識喚起、外部との交流にどのように役立つかを明らかにすること、第三に、これらの活動を日タイ協働の PBL として実施し、学生の異文化理解力、実践的技術力、国際的なチームワーク力を育成することである。

本研究は、単年度の活動として始まったものではない。申請者は 2014 年度から、チェンマイ大学（CMU）、メージョー大学（M JU）とともに、チェンマイ県サンパトーン郡のタイ・クーン族集落で居住文化研究を継続してきた。2019 年には、住民委員会との協議を経て、築 80 年程度の古民家を改修し、タイ・クーン文化センターを中心施設とするエコミュージアムを開設した。本研究は、こうした既存の活動を再点検し、修復、記録、展示、教育を組み合わせた方法論として整理する段階に位置づけられる。

2.　調査研究の方法及び実施体制

本研究の特徴は、文献調査や概念整理だけでなく、実際のワークショップ（WS）を通じて、調査、記録、修復、展示、設計提案、発表を現地で行った点にある。具体的には、2025 年 7 月末～8 月に東京及び近郊で受入型 WS を、2026 年 3 月にはタイ・チェンマイで現地型 WS を実施した。東京で基礎技法を学び、チェンマイでそれを現場に応用する二段階構成とした。

東京 WS では、芝浦工業大学の学生・教員に加え、カセサート大学（KU）、CMU、M JU の学生・教員が参加した。7 月 26 日に SIT 豊洲キャンパスでガイダンス、エコミュージアムに

関する講義、文化の保存・活用に関する講義を行い、その後、実地研修に移った。川崎市立日本民家園では古民家の実測と観察を行い、建物の構法、材料、空間構成、生活行為との関係を学んだ。川越市では、歴史的町並みの保存と観光利用、生活空間との関係を調査した。江戸東京たてもの園では、移築保存された建築を対象に、記録と観察の技法を確認した。さらに神楽坂では、都市の路地、坂、店舗、住宅、歩行者動線、歴史的記憶を読み取るデザイン・サーヴェイを実施した。学生は日タイ混成チームを組み、「神楽坂を後世に残すためのエコ・ミュージアム化」をテーマに提案を作成し、最終報告会で発表した。

チェンマイ WS は、2026 年 3 月 18 日から 27 日まで実施した。3 月 19 日にはチェンマイ旧市街の博物館、寺院、ランナー建築センター等を訪問し、チェンマイの歴史と都市形成について学んだ。3 月 20 日から 23 日までは、チェンマイ市街から南に位置する Ton Haen Noi（以下、THN）村に滞在し、タイ・クーン文化センターを中心に、建物の修復、屋根材や瓦の確認、展示物の再生、周辺景観の修景を行った。3 月 24 日、25 日にはチェンマイ旧市街に戻り、歴史地区を対象とする PBL を行った。3 月 26 日には成果発表会を実施し、農村集落で得たエコミュージアム技法を都市の歴史地区へ応用する可能性を検討した。

なお、これらの WS 参加学生に、工学教育コンピテンシーの指導とその評価を行った。また CMU Teaching and Learning Innovation Center (TLIC)と日タイ工学教育に関する検討を行った。

3. 調査研究の結果

本研究では、東京での基礎的技術研修とチェンマイでの実践的応用を連続させることにより、エコミュージアム技法の移転、居住文化の保全継承、国際 PBL 型人材育成を一体的に実施することができた。

第一の成果は、エコミュージアム化に必要な基礎的技法を、日タイ学生が共通の学習経験として習得できたことである。東京 WS では、伝統建築、町並み保存、移築保存、都市の路地空間という異なる対象を比較しながら、実測、観察、写真記録、空間分析、提案作成を行った。これにより、学生は建築を単体の保存対象として見るのではなく、地域の歴史、生活、社会関係と結びついた文化資源として理解する視点を得た。

第二の成果は、東京での調査が単なる見学に終わらず、最終提案に結びつく PBL として機能したことである。とくに神楽坂では、路地、坂、店舗、住宅、記憶の断片を地域全体の展示資源として再構成する提案が行われた。これにより、エコミュージアムの方法が農村集落に限らず、都市の歴史的空間にも応用可能であることが確認された。

第三の成果は、チェンマイでの現地型 WS において、エコミュージアムの維持管理が具体的な修復実践として行われたことである。THN 村では、タイ・クーン文化センターを中心に、建物や展示物、周辺景観の点検と再生を行った。これは単なる施設修繕ではなく、開設後のエコミュージアムをどのように維持し、更新していくかを学ぶ実践であった。学生は、材料の状態、住民の意向、天候、作業時間、既存建物の傷み具合など、現場で生じる不確定な条件に対応しながら作業を進めた。

第四の成果は、人材育成である。東京とチェンマイの両 WS では、日タイ学生が混成チームで調査、修復、設計提案、発表を行った。言語、文化、教育背景の異なる学生が協働するためには、役割分担、意思疎通、相互理解、合意形成が不可欠である。この経験は、専門知識の習得に加え、国際的なプロジェクトを進めるための実践的能力を育成する機会となった。その結果、コミュニケーション、チームワーク、生涯学習などのコンピテンシー向上が確認された。

この成果は、アメリカ工学教育協会年次総会において論文投稿・発表を行った。

4. 考察（又は調査研究のまとめ、今後の展開、提言、ほか）

本研究を通じて明らかになったのは、エコミュージアム化とは、単に古民家を保存し、展示物を整備し、観光客を受け入れることではないという点である。むしろ、それは地域に日常的に存在する文化資源を発見し、住民と外部者が協働して記録、修復、展示、発信を行い、生活を壊さない範囲で外部との接続を設計する実践である。

この実践では、第一に「常在する文化資源」を発見する視点が重要である。住居、穀倉、屋敷構え、寺院、路地、農具、食、儀礼、住民の語りなど、地域の人びとにとって身近なものこそが、エコミュージアムの基盤となる。第二に、それらを外部者に伝えるための「翻訳」が必要である。実測図、写真、展示、説明ボード、マップ、発表資料は、地域文化を理解可能な形にするための媒体である。ただし、外部者向けに説明しすぎると、生活文化が観光用の表象に変質する危険もあるため、住民の語りを起点にした慎重な設計が求められる。

また、技術移転においては、日本で有効であった方法をそのまま移すのではなく、現地の材料、気候、劣化状況、道具、住民の生活時間、管理能力に合わせて調整する必要がある。重要なのは、技術を単なる「作業手順」としてではなく、「判断の手順」として共有することである。どの部材を優先的に修復するのか、既存材料をどこまで再利用するのか、展示と日常利用をどのように両立するのかといった判断は、現場ごとに異なる。また、この文化資源、技術移転の過程では、次代の担い手となる学生の意識とスキルを、工学教育コンピテンシーとして指導することが不可欠である。本研究では、現場重視の実践的な WS を通して、両国の学生が未知の領域に飛び込み、そこにある新たな価値を尊重する行動変容とスキル習得が確認された。

今後は、本研究の成果をエコミュージアム・マニュアルとして整理することが有効である。ただし、それは一律に使える標準仕様書ではなく、地域条件に応じて判断を助ける実践的な手引きであるべきである。そこには、地域資源の発見・記録、建築・景観・生活行為の可視化、修復の優先順位づけ、展示・解説・案内ルートの設計、住民主体の運営体制、PBL 型教育プログラムの評価を含める必要がある。また、両国の教育・研究者の緊密な連携も不可欠である。

以上のように、本研究は、エコミュージアムを単なる地域振興や観光開発の手段としてではなく、居住文化を生活の中で継承し、その価値を住民・学生・教員が協働して再発見する実践として位置づけ直した。東京で学び、チェンマイで応用し、その成果を再び方法論として整理するという往還的なプロセスを通じて、エコミュージアム技法の移転可能性と、国際 PBL による人材育成の有効性を確認することができた。